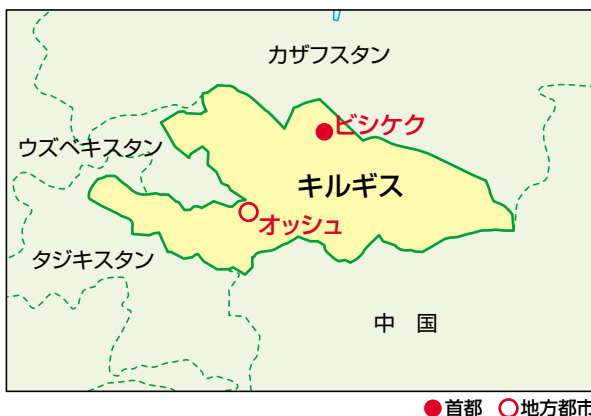


キルギス共和国

Kyrgyz Republic



一般事情

- 《面積》19万8,500km²(日本の約2分の1)
《人口》482.3万人(1999年3月末)
《首都》ビシュケク(Bishkek)
《民族》キルギス人(64.9%)、ウズベク人(13.8%)、ロシア人(12.5%)、ウクライナ人(1.0%)、ウイグル人(1.0%) (1999年3月)
《言語》公用語はキルギス語
《宗教》キルギス人の間ではイスラム教スンニ派が優勢
《略史》15世紀後半、キルギス民族の形成。18世紀半ば、キルギス地方(キルギスタン)は中国・清朝の支配下に入る。19世紀前半、ウズベク人のコーカンド・ハーン国、キルギスタンを制圧。1863年、ロシア帝国、キルギス人の大部分が住む北キルギスタンを領有する。1876年、ロシアが南キルギスタンを領有。1918年5月、ロシア革命後、ロシア共和国内の『トルキスタン自治ソヴィエト社会主義共和国』の一部となる。1924年10月14日、ロシアの民族間国境確定により、ロシア共和国内の『カラ・キルギス自治州』となる。1925年5月25日、『キルギス自治州』に名称変更。1926年2月1日、自治州を『キルギス自治ソヴィエト社会主義共和国』に格上げ。1936年1月25日、ロシア共和国から切り離し『キルギス・ソヴィエト社会主義共和国』を創設。連邦構成共和国としてソ連邦に加盟。1990年12月12日、共和国主権宣言。1991年8月31日、共和国独立宣言。1993年5月、国名を「キルギス共和国」に変更。

政治・経済

- 《政体》共和制
《元首》アカーエフ、アスカル・アカーエヴィチ大統領(95

年12月および2000年10月の大統領選挙で再選。任期は2005年12月まで)

《議会》二院制(下院:立法会議、定員60名、上院:人民代表会議、定員45名)。なお、2000年2月~3月にかけて上下両院議員選挙が実施された。その際、定員変更(下院:35→60名、上院70→45名)および一部比例代表制(下院15議席)が導入された。

《政府》首相 バキエフ、クルマンベク・サリエヴィッチ

《主要産業》農業・畜産業、軽工業、鉱業

《GNP/一人当たりのGNP》14.4億ドル(99年:世銀)
/300ドル(99年:世銀)

教育制度等

《教育制度》初等・中等教育(シュコーラ)は一貫教育で11年制となる。初等教育が3年間(6歳または7歳~9歳または10歳)、中等教育が8年間(9歳または10歳~16歳または17歳)。専門学校に進学する者は、中等教育機関で9年生を終えると3年間専門の教育を受ける。高等教育機関には大学(4年または5年間)、コレージュ(3年間)がある。

《教育行政》初等、中等、高等教育機関のほとんどが、教育科学文化省の管轄下にある。

《言語事情》独立後、公用語はキルギス語となったが、2000年4月に新たにロシア語も公用語となった。キルギス系住民はキルギス語、ロシア系住民はロシア語を使用しているが、ソ連時代のロシア語教育の影響で、公共機関においてはロシア語使用が頻繁である。

《外国語教育》シュコーラの8年生から11年生までを対象に外国語教育が行われる。公用語がキルギス語とロシア語であるため、キルギス語を使用する学校ではロシア語が必修、ロシア語学校ではキルギス語が必修となっている。その他、多くの学校で第一外国語として英語教育が行われている。一部の私立学校では、第一外国語のほかに第二、第三外国語としてドイツ語やフランス語が選択されている。日本語教育を行っている学校は2校である。

日本との関係

《外交関係開設日》1992年1月26日

《在留邦人数》38人(2000年10月現在)

《在日当該国人数》44人(2000年12月現在)

日本語教育事情

1. 日本語教育の実施概要

多くのNIS諸国と同様、キルギス共和国（以下キルギス）でも、独立後、外国語教育に力が入られるようになると、日本語は英語に次ぐ人気外国語となった。

1991年、キルギス国立民族大学（以下民族大学）東洋学部に、日本語学科が新設されたが、翌年、ビシケク人文大学（以下人文大学）が創設されると、学生はすべて人文大学に移籍した。その後、民族大学の他学部でも日本語教育が始まり、98年に、キルギス国立教育大学附属東洋言語文化大学（以下言語大学）ができると、日本語専攻学科をもつ大学は3校となった。

一方、他大学でも日本語コースを置く機関が増え、首都以外でも、99年にオッシュ大学で日本語教育が始まり、さらに、ナリン大学、カラコル大学でも日本語講座開設の動きがある。

キルギスの首都、ビシケクの初・中等教育機関における日本語教育の歴史は古く、91年の独立後間もなく、ビシケク第一寄宿学校（11年制）で行われており、一時は、250名を越える学習者を数えた。他の学校でも教えられたこともあるが、主として教師不足から定着しなかった。99年から、キルギス国立教育大学の附属高校でも教えられている。

このほかに、両国政府の合意により設立されたキルギス日本センターがあり、95年9月より主に社会人を対象に日本語教育を行っている。

< 高等教育機関 >

キルギス国立民族大学

ソ連時代からある、キルギスにおける中心的な大学の1つであり、キルギス独立後、最初に日本語学科を創設した大学でもある。現在は、日本語を専門とする東洋学部のほかに、国際関係学部、歴史学部、コンピューター技術・インターネット学部でも日本語を教えており、キルギスの高等教育機関の中では、日本語教育の規模が最も大きい。

(A) 東洋学部

東洋学部は、キルギスで一番早い1991年9月に、日本語教育を開始した機関である。日本語学科開設当初は、ブジェット（授業料免除の奨学生）のみのクラスで、教師は日本人ボランティア教師1名であった。しかし、翌年9月から、キルギス文部省の方針変更により、東洋学部の学生は全員人文大学に移籍した。この年以降、東洋学部の学生は、全員、コントラクト（授業料を一部または全額負担する学生）となった。現在では、東洋学部は、キルギスの主要な日本語教育機関の1つとなっているが、日本語講座の運営、教師の質や定着率の面で問題を抱えている。

日本語を主専攻とする学生数は65名で、授業時間数は、5年間で約860コマ（80分/コマ）、カリキュラムは、総合日本語の授業のほかに専門科目がある。専門科目の中には、東洋史、東洋文学史、東洋文化史、アジア経済論、地政学、民族学等がある。大学院はなく、修士号、博士号を取得した者はいない。5年の卒業時には、日本語能力試験2級に合格する程度の日本語力をつけることを到達目標としている。

教育設備は、キルギス国内では比較的整っている方である。国際交流基金の教材支援等で図書を充実させ、また、キルギス日本センターの視聴覚教室を利用して、聴解等の練習を行っている。国際交流基金の長期教師研修にも若手教師を送り、教師の質の向上に努めている。

(B) 国際関係学部

国際関係学部は、1995年9月に設立され、同時に日本語教育を開始した。国際関係学部での教育は外交官養成を目的としており、専門科目として政治、経済、外国語に力を入れている。第1外国語の英語は必修で、第2外国語として日本語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、トルコ語、中国語、アラビア語のうちの1言語が選択必修科目となっている。それぞれの言語を第2外国語と

して履修している学生数は、ほぼ同じである。

日本語教育の方針として、「読み・書き・文法」を特に重点的に指導している。学生は、専門の勉強に忙しく、日本語学習にあまり時間を割かないため、学習意欲に欠ける学生がみられることが問題点としてあげられる。

(C)歴史学部地域研究学科

日本語は副専攻として、英語、フランス語、ドイツ語、トルコ語とともに必修選択科目の1つとなっている。専門科目は歴史と文学で、日本語を履修している学生は日本史が専門である。同学部では、日本語の知識をもった歴史の専門家養成を目指している。1997年9月から日本語教育を開始したが、教育体制の整備が遅れている。

(D)キルギス・アメリカコンピューター技術・インターネット学部

1997年9月に同学部は設立されたが、日本語教育は99年9月より開始した。日本語の単位は、卒業には必要ではなく、希望者に対し教えている。日本のコンピューター技術の獲得や、日本のコンピュータープログラムの利用を可能とすることを目的としている。したがって、教育内容は、コンピューター関係の文献が読め、インターネットからの情報を得ることができるために、最低限必要な日本語力をつけ、独自の方法で漢字検索ができるように指導している。しかし、目的達成のための教材、カリキュラムの整備という点ではこれからである。

国立ビシケク人文大学

ビシケク人文大学の前身は、1979年に設立された言語人文大学である。言語人文大学は、ロシア語・文学部、キルギス語・文学部の2学部で発足した。91年8月の大学改組、学部増設により人文大学が発足し、新設された東洋・国際関係学部は日本語・日本学専攻講座ができ、日本語教育が始まった。94年8月に、国立ビシケク人文大学と改称し、東洋・国際関係学部、ゲルマン語系言語学

部、ロシア語・文学部、キルギス語・文学部、経営社会学部、通信教育学部の6学部となった。その後も学部が新設され、現在では9学部1研究所となっている。

東洋・国際関係学部には、日本語・日本学のほかに、トルコ語・トルコ学、アラビア語・アラビア学、朝鮮語・朝鮮学、ペルシア語・イラン学、中国語・中国学の6専攻の講座がある。

使用テキスト別に見る教師担当授業配分

学年	コントラクト		プロジェクト
	クラス1	クラス2	クラス3
1年	キ教師3コマ: 日本語初歩	キ教師5コマ: 日本語初歩	キ教師4コマ: 新日本語の基礎、 日本語の文化
	キ教師2コマ: 新日本語の基礎		
	キ教師1コマ:にほんごきいてはなして、 楽しく聞こう、クラス活動集101		
2年	キ教師3コマ、キ教師2コマ: 新日本語の基礎		日教師2コマ: 文化初級日本語 キ教師3コマ: 新日本語の基礎
3年	日教師4コマ、キ教師2コマ: 中級から学ぶ日本語、同ワークブック、同テープ	キ教師3コマ、日教師3コマ: 日本語表現文型、にほんごでくらそう	日教師3コマ、キ教師3コマ: 文化中級日本語
4年	日教師3コマ:総合日本語中級、中級日本語 語彙文型文例集		日教師6コマ:現代日本語コース中級、 日本を知るそのくらし 365日
	日教師2コマ:日本の産業		
	日教師1コマ		
5年	日教師5コマ:NHK教育セミナー歴史で見る日本、日本史年表		

*2001年度1月/1コマ80分/キ教師:現地人教師 日教師:日本人教師

日本語専攻講座発足当時には、ビシケク在住の日本人が教鞭をとったが、後にキルギス人教師も加わった。94年3月以来、日本ユーラシア協会から日本語教師が派遣され、日本語図書・教科書等の支援を受けている。同年6月には、WEP(世界環境平和会議・郵政省ボランティア基金)の援

助により視聴覚、LL教室の施設が整い、本格的な教育体制ができた。

また、95年以来、国際交流基金より教材・図書等の支援を受け、98年には名古屋大学大学院より教材・教科書の提供、99年はNHK教育テレビ日本語講座から教材・図書の提供を受けた。00年度から青年海外協力隊より日本語教師が派遣されている。

修学年限は5年で、授業時間数は1666コマ(80分/コマ)、各学年2~3クラスで、現在、学生数は119名である。修士課程、博士課程もあり、これまで博士課程に進んだ者はいないが、修士課程には、現在4名の大学院生がいる。カリキュラムは日本語の授業のほかに、各専攻コースにより専門科目がある。キルギスで、ブジェットの学生がいるのは同大学だけとなっているが、入学試験におけるブジェットの学生の競争率は7倍(99年度)と高く、また、コントラクトの学生の場合も5倍であり、学内では日本語専攻の入試倍率が一番高い。

同大学の講座運営は、組織的に行われており、教育環境も比較的整っている。専門家はいないが、教師陣にも恵まれてはいる。教師数も13名と、キルギスでは最も多いが、待遇面の問題からか教師の移動が激しい。

キルギス国立教育大学付属東洋言語文化大学

同大学は、1998年に国立教育大学付属大学として設立された。現在は、文学部、文化学部、地域研究学部、ジャーナリズム学部の4学部がある。日本語講座設立のきっかけは、学長が、特に日本語教育を中心に、大学を発展させたいと考えたことが大きい。初年度の入学生は、116名にもほり話題となった。

しかし、急激なインフレによる経済状態の悪化から、初年度の入学生(現3年生)は48名に減少し、2年生が29名、1年生が25名と、初年度のような勢いはない。

また、それぞれの学部の専門科目と、外国語(日本語、アラビア語、トルコ語、ペルシア語、中国

語、ハングル語)を1つ主専攻とする二専攻制である。したがって、日本語を主専攻する学生は全4学部にわたる。その数は全体の4割にも達し、最も多い。各学年、日本人教師と現地人教師のチームティーチング体制をとり、日本人は主に会話、現地人教師は文法を担当している。

日本語を専門科目とするキルギスの3つの高等教育機関の中では、本機関は最も歴史が浅く、教育設備の面でも劣るが、教育成果は次第にあがりつつあり、日本国文部科学省の留学生や国際交流基金の研修生を出すまでになった。

学科長中心にまとまって講座運営がなされおり、教師陣にも比較的恵まれているが、現地の若手教師の育成が急務となっている。また、視聴覚設備の充実、教材の整備等、教育環境を整えることも課題である。

キルギス・アメリカ大学

キルギス・アメリカ大学の前身はキルギス国立民族大学で、その中の英語部門が独立して同大学となった。語学教育を重点的に行っており、その一環として、1997年9月から日本語教育も導入され、日本語コースが開始された。日本語は、フランス語、中国語、スペイン語、ドイツ語、トルコ語、アラビア語とともに選択科目の1つである。選択外国語は、複数選択も可能である。これらの外国語は必修科目ではなく、単位の取得は、卒業の条件とはならない。

日本語の最長履修年限は4年である。同大学でユニークな点は、日本語コースが、初級、中級のコース別クラス編成となっており、学部や学年を問わず日本語履修希望者は、希望のコースを選択できる。しかし、コース別クラス編成であるため、時間割の都合で日本語を継続できなくなるなどの理由で、学習者の定着率は悪い。

私立経営ビジネス観光大学

1992年に設立され、97年9月から、通訳・ガイド専攻の学生を対象に日本語が教えられている。将来は、観光業界でガイドの仕事や、通訳をした

いと考える学生が多いが、日本語の修業年数は、3年と短く、3年修了時には、初級の前半程度の学力しかつかない。専門分野での日本語能力が必要とされ、より実践的な運用能力が求められるが、他の専門分野の勉強が負担になり、日本語学習への取り組みが低調である。

さらに、カリキュラムが専門分野での能力の向上に相応しないことなどから、大学の特殊性を、十分に生かした教育とまでは至っていない。

建築大学

1992年設立。日本語コースは、大学の正規カリキュラムの中には組み込まれておらず、希望学生が授業料を支払い、授業に出席している。このコースは、学生の強い要望により、00年3月に開設されたが、任意のコースであるため、1年間にわたって継続的に授業が行われなかった。

また、学生の学習動機にも、ばらつきがあり、参加意欲も様々で、出席率も一定せず、クラスを統括していくのが困難な状況である。担当教師は1名で、ロシア語教授歴は長いが、日本語は、キルギス日本センターのコース修了後、教えることとなった。

01年度から、大学の財政運営形態が変わるため、外国語教育を実施している学部内に、日本語コースを常設することを目指している。

オッシュ国立大学(オッシュ)

オッシュ大学は、1951年に創立された、キルギスでは伝統のある大学である。日本語教育は、民族大学卒業の教師2名を迎え、99年9月から開始した。現在、首都ビシケク以外にある、唯一の日本語教育機関である。日本語教育の行われている国際関係学部では、日本語のほかに、ペルシア語、中国語、ハングル語、ヒンディー語教育を行っている。

日本語講座立ち上げ準備が、まだ十分ではなく、これから体制を整えていく必要がある。01年度から、民族大学出身の教師に代わり、新たに人文大学卒業の教師2名が教鞭をとることになっている。

<初・中等教育機関>

ビシケク第一寄宿学校

校長、父母の強い要望により、キルギスにおいては最も早い、1991年9月より、日本語が第2外国語として始められた。日本語学習者は、8年生から11年生までの約120名で、4年間で『新日本語の基礎』を終えることを目標としている。

授業は、各学年、週2コマ計90分である。教授方法は、読み書き中心の伝統的な訳読法である。第5回中央アジア日本語弁論大会キルギス予選大会には、中等教育機関から唯一、同校が出場者した。

キルギス国立教育大学付属東洋学高校

キルギス国立教育大学付属東洋言語文化大学が設立されたのにもない、同じ教育大学付属の東洋学高校でも日本語教育が開始された。日本語は、8年生から11年生までの44名が学習している。クラスは学年別ではなく、能力別の学年混成クラスである。8年生から日本語学習を始めた場合、最長で4年間学習することができる。各クラス1コマ、60分授業を週3コマ行っている。

主教材には『みんなの日本語』を使用し、4年間で『みんなの日本語』を終えることとしている。

2. 日本語教師について

<概観>

現在把握している、キルギスの日本語教師は46名で、そのうち、女性が28名と全体の6割を占めている。日本人教師は、16名で全体の約35%である。

現地人教師は、民族大学、人文大学の日本語専攻の卒業生が中心で、20歳代の若手教師が多い。大学で日本語を専攻したものの、教授法等の専門教育は受けておらず、手探りの状態で、日本語を教えている場合が多い。しかし、国際交流基金の長・短期教師研修への参加により、教授法を学んだ教師も徐々に増えてきている。

日本人教師は、現地機関との契約書を交わして

教えている者が多く、そのほかには、(社)日本外交協会からのキルギス日本センターに派遣されている専門家が1名、青年海外協力隊員が1名、加えて、ロシア語を勉強しながら日本語を教えている者もいる。

日本人教師の年齢は、20～70歳代まで様々で、その多くは、日本語教育を専門的には学んでいないが、日本語を専攻科目とする3大学において、日本人教師が指導的立場に立って講座の運営にあっている。

現地人教師と日本人教師が、チームティーチングをしている場合には、日本人教師が会話や漢字を担当し、現地人教師が文法を教えることが多い。日本人教師1名で授業を担当している場合は、ほとんど直接法で教えている。現地人教師の場合も、初級の初期の段階を除いては、極力、直接法で教えようとする姿勢が見受けられる。

<日本語教師会の活動状況>

キルギス日本語教師会は、1999年10月に規約を定め、役員を選出して正式に発足したが、それ以前から教師会としての活動は行っていた。キルギスにおける日本語教育の発展を図ることを目的とし、日本語教育に関する情報交換の場、日本語教師相互の親睦・交流の場となっている。



キルギス日本語教師会の月例会合

教師会の主な活動としては、キルギスおよび中央アジア弁論大会・日本語教育フォーラムの開催、教師会会報の発行、公開授業の参観、教師会ホームページの作成等である。原則として月1回会合を行っている。

3. 教育機器について

キルギスの中では、ピシケク人文大学、キルギス・アメリカ大学において、教育機器が比較的充実している。その他の機関は、テープレコーダーを所有している程度で、しかも教材のテープが少ないため、それさえ有効に活用されていない状況となる。

学生用のコンピューター室は、ほぼ全部の機関が備えているが、日本語ソフトが使えるところは少なく、授業や自習にコンピューターを使うことはほとんどない。コンピューターを使って教材を作成する教師は、ほとんどが日本人で、その場合、たいてい個人所有のコンピューターを使用している。インターネットを授業や、日本語関連の情報収集のために利用している教師も日本人が多く、同じように個人的に利用している。

4. 教科書、教材について

キルギスにおいて、主に使用されている教科書は、初級では『新日本語の基礎』、『日本語初歩』、中級では『文化中級日本語』、『日本語中級』、『日本語表現文型中級』等である。他のNIS諸国と同様、キルギスにおいても教科書・教材の不足は深刻である。

学生が自分の教科書をもっているのは稀であり、通常は教師の教科書をコピーして使っているが、キルギスの経済事情を考えるとコピー代も学生には大きな負担となる。近年は、国際交流基金、その他の団体から教材助成、図書助成などを得て、徐々にその充実を図っている機関もあるが、図書の管理が十分ではなく、有効に利用されている機関は少ない。

5. 学習目的、到達目標について

キルギスにおける日本への関心分野は、歴史、文化、伝統、日本人の生活などのようだ。しかし、一般的には、キルギスには日本に関する情報は非常に少なく、日本語の勉強を始める前に、日本について多くを知る機会は稀で、むしろ勉強を始めてから、興味のある分野が見つかるようである。

日本語を学ぶ動機は、日本語を専攻している場合は、将来、日本語を使った仕事につきたいという者が最も多い。また、専門外で学んでいる場合は、自分の専門分野の知識に加え、日本語力をつけて就職を有利にしたいとしている。

しかし現実には、就職が難しいため、途中で日本語の学習を放棄して、他の専攻に変更したり、学習目的が定まらず、学習意欲をなくしていく者も中にはいる。日本語を使う仕事としては、教師となった者が最も多く、通訳を本業とする者や就職先で日本語を使用する者は非常に少ない。

到達目標は、中等教育機関では、初級の前半を終えて、簡単な会話ができ、平易な文が読める程度である。高等教育機関では、機関によって異なるが、日本語を専門とする学部では、日本語能力試験2級合格程度が目標で、人文大学では、1級合格が目標である。その他の機関で、授業数の少ないところでは、初級を終える程度としている機関があるほか、専門分野での日本語能力の向上を目指している機関や、教養としての日本語と位置付けている機関もある。

6. 日本語教育に関する問題点と取り組み

最も大きな問題としてあげられる点は、日本語教育の環境が十分に整っていない点である。まず、教科書が学生1人に1冊ないことである。1ヵ月の給与が1,000円、2,000円という人がいる中で、1冊3,000円する日本の教科書を自分で購入することはできず、支援が必要である。機関によっては主教材でさえも教師分がなく、副教材が充実している機関は限られている。視聴覚教材については、教科書用のカセットテープがある程度で、ビデオデッキを使用している機関は少ない。

教師不足が問題となっている機関も多い。日本人教師のいない機関は、日本人教師を求めている。また、日本人教師のいる機関でも、日本語教育専門家の必要性を問題点としている。教師の一番の問題は、定着率の悪さである。日本人教師は、中には長く教えている者もいるが、たいてい2~3年間教えて、教師を辞める場合が多い。現地人教

師は、日本留学や日本での研修を希望する者、教師の給与の低さから、何かビジネスチャンスがあれば、そちらに乗り換えようと思う者などがいて、長期間働く者がいない。

しかし、日本語教育が始まってまだ10年というキルギスの現状を考えると、仕方ない面もある。若手教師が日本に留学したり、日本で研修を受けたりした上で帰国し、初めてキルギスの教育体制も整うのではないだろうか。

各機関が、今後の取り組みとしてあげているのは、教科書、教材、教育機器の整備と人材の育成である。現在、特に日本人教師が中心となって、現地人の若手教師の育成を積極的に考えている。学生の学習意欲を高めるため、就職の斡旋や日本への留学機会の拡大を進めようとしている機関もある。

7. 求められる日本語教育支援

日本人にあまりなじみのない中央アジアの小国で、これほど日本に関心を持ち、民族的・言語的親近感(母語との)を持ち、日本語を学ぶ人がいるという事実の周知も、日本側からの支援の一步といえよう。具体的には、教材、図書、教育機器支援が望まれている。キルギスの日本関係図書は貧弱で、日本語学習者の知的欲求を満たすのに十分ではない。日本関係の図書を集めた図書室ができれば理想的である。

次に、現地人教師の中から日本語教育専門家を養成することがあげられる。日本語教育だけに限らず、一般的に日本学研究者の育成のための支援も、早急に必要である。現在、文部科学省や国際交流基金の支援で、キルギスでも研究者や教師が育ちつつあるが、教師の定着率の悪さから考えると、まだまだ人材は足りない。

中等教育機関での日本語教育の拡大を促すために、中等教育のできる教師育成も必要である。日本での研修だけではなく、中央アジアのいずれかの国で、日本語教師養成セミナーやブラッシュ・アップセミナーが定期的に行われることを現地では強く望んでいる。